COM Vol.15 2001

NISSEI PARKING SYSTEMS

高松　伸 建築設計事務所 プレゼンテーションルーム

CONTENTS

● Front Line［建築家インタビュー］●

高松 伸 3

● Arrangement［導入事例］●

カルピス大阪ビル 8

読売広告社新本社ビル 10

:BS（コロンブス） 12

● New Line Up［製品情報］●

タッチパネル操作盤 ／COM プレゼント 14

● Another Project［他事業部紹介］●

音声認証システム 15

COMトーク　自然をプラスアルファする工夫を　菊川　怜

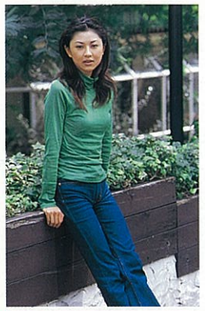
子供の頃から工作が好きで、建物に関心がありました。イタリアを旅行した時、街と建物、そして自然が見事にマッチしている都市空間に魅せられ、将来は建築家になろうかと大学では建築学科に進みました。

今の日本の街並みはどこも画一的で、それでいて混然としています。個々の建物が、全体との調和を考えずに勝手に建てられているような気がします。だから、街並みとしての落ち着きや個性が感じられないのでしょうね。

車を運転する機会が多いので、いつも感じるのは駐車場が心なごむ空間であってほしいということ。車という無機質なものを収容する設備である以上やむをえないのかも知れませんが、ちょっと冷たい印象を受けます。

狭いスペースを有効利用しなければならないという制約があるにしても、自然をプラスアルファする工夫ができないものかと。私が女優でなく建築家の道に進んでいたなら、もう少し駐車場に対して、設備面は無理ですが外装だけでも明るく自然なものにしたいですね。

最近は女性の建築家が活躍する場が増えてきているので、21世紀には女性ならではの感性をいかした建物が新しい街並みをつくってくれるはず、と期待しています。



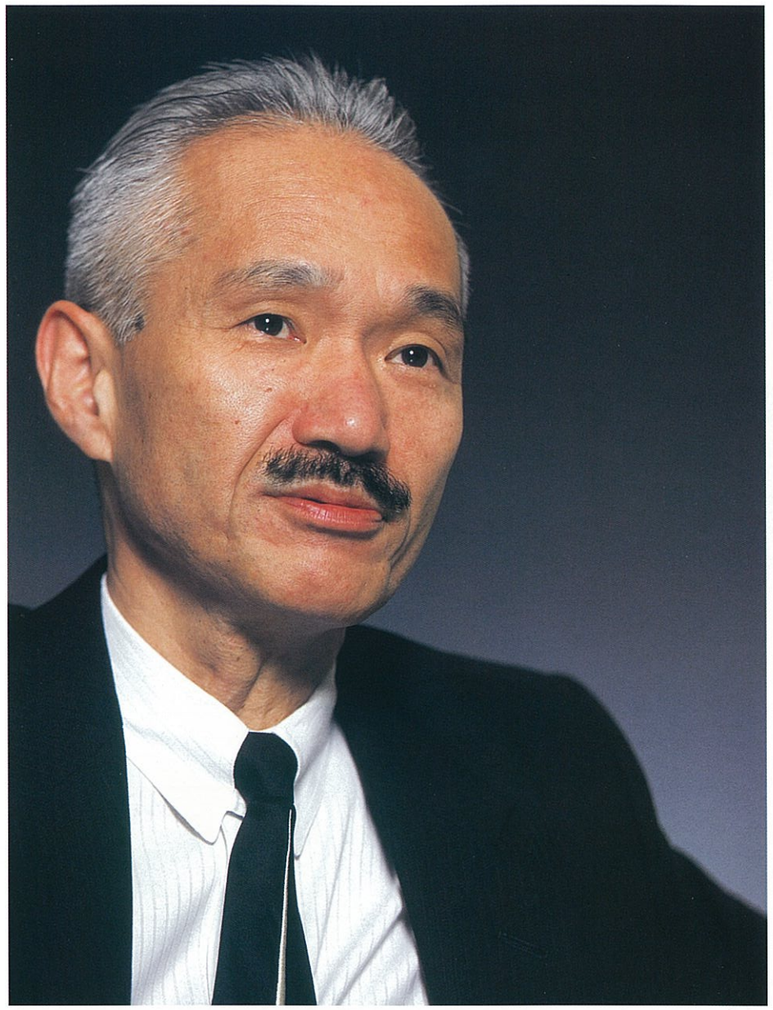
菊川 怜　Rei Kikukawa

■1978年埼玉県生まれ。東京大学工学部建築学科在学中に'98オスカーグラビアグランプリに選出され、モデルとしてスタート。その後に女優宣言をし、大学卒業後は「編集王」［CX火曜21時ドラマ］などにレギュラー出演。今春には、主役デビュー作品となるハリウッド映画「BLOODY」が全米100館で公開が予定されている。

高松 伸

建築家インタビュー

建築が人の心をつかむ瞬間との遭遇建築は、単なる箱ではない。時に人を畏怖せしめ、時に人の心に灯をともす能力を持つ。



Shin Takamatsu

ワコール本社ビルや数多くの公共建築を手がけ、
強烈な個性を持つ建築家として著名な高松伸氏は『粋を感じる人』でもある。
格安の予算で若い夫婦に「水道局員の家」を建てたエピソードを持つ建築家は、
余塵くすぶる震災直後の台湾に飛び、再生のシナリオを描く。
少年の日に出会った出雲大社の迫力。エーゲ海のパルテノン神殿で受けた衝撃。
建築には建てられたその街に新しい意味を与え、その場所の美しさを深める力があると
語る氏は、超高層木造建築という新しい夢に挑んでいた。

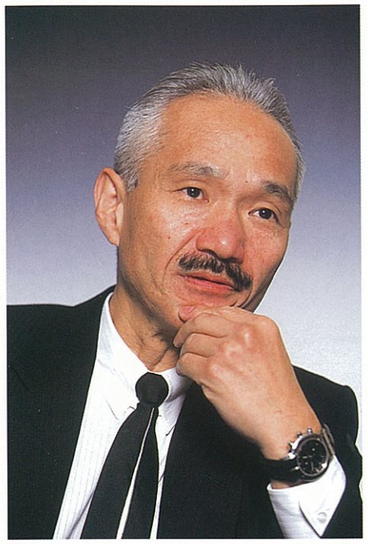
緻密な計算に裏打ちされた、猛烈なスピード 台湾の若きエグゼクティヴたちと渡り合う興奮

現在、台湾での複数のプロジェクトを進めているところです。なかなかエキサイティングな仕事で、現在既にオフィスビル2棟が着工し、一方で4万平方メートルのオフィスの設計が終わろうとしています。加えて、台北市の中心部に建設する予定の超高層6棟を含む延床99万平方メートルの開発設計に着手したところです。

これらのプロジェクトは、そもそも台湾出身の若いスタッフの縁で始まったものです。大地震の直後帰国した彼から、急遽来て欲しいとの連絡を受けました。通信状態が不良で、内容のほどは定かではなかったのですが、なぜか建築家として行くべきであると思ったのです。その時の話ですが、フライト直前に再び大きな余震があったというニュースが入りました。関空のラウンジでテレビを見ていた搭乗客が次々とキャンセルしていく中で、私も大いに不安でしたが、決意は全く変わりませんでした。まさに「飛んで火に入る…」という気分でしたね。

到着直後、彼は台湾で最大手の開発会社社長との面談を設定していました。その席で、幸か不幸か私達は既に阪神大震災という同様の事態を経験しており、その経験を大いに活用すべきであるとともに、災害の復興は物質の復興ではなく、まず心の復興を考えるべきであるとお話ししました。その言葉にじっと耳を傾けていた社長が、やおら私にこう言ったのです。「今こそ、私はこの国のために働きたいと思う。新しい台湾のために一緒に仕事をしていただけますか。」…と。それが全ての始まりでした。

台湾の経済は、穏やかではありますが順調に成長を遂げつつあります。なおかつ、その成長を支えている世代は非常に若い。戦後世代の二世又は三世が欧米で高い教育を受けて帰国し、その知識を積極的に活用しようという野心に燃えています。ライバル達が群雄割拠の状況ですから、決断が冷たいまでに合理的で、かつ極めて迅速です。若さならではの合理性とスピード以外のなにものでもありませんが、これが私達にとってはなんとも心地良い。減速、というよりも停滞という言い方がふさわしい今の日本の状況では思いもよらないことですが、合理的判断とスピードは、高いクオリティを達成するために必要不可欠な条件です。創造活動の両輪であると言っても過言ではありません。私達は、これまで可能な限りそのようなプロジェクトに携わることができるように努めてきましたし、その過程で培ってきた方法論や機動性が、この台湾のプロジェクトでは実に見事に噛み合ってくれています。従って、たとえ100万平方メートルに近いプロジェクトであろうと、プレゼンテーションから決済まで2ヶ月しか要していません。



ゴールデンカスケード（台湾）

メトロツインタワー（台湾）

現代建築が失ってしまった大切なものとは? 『理由』無く人の心を打つ建築

高松氏によるスケッチ（パルテノン神殿）

私の建築との最初の出会いは出雲大社本殿であると言って良いでしょう。島根県の小さな寒村で生まれた私にとって、建築家はおろか建築という存在など全く無縁でした。生まれは仁摩町という半農半漁の村ですが、出雲の大社町に親戚があり、どういう事情か、しょっちゅう長期間預けられました。遊び場は出雲大社の境内。ある日の夕暮れ時、一人境内に残り、ふと本殿を見上げた瞬間、とてつもない恐怖を感じたのです。今にして思うと、それが私と「建築」との最初の出会いです。それ以降「建築とはなにか」という問いが私の中に居座り続けています。ところで出雲大社本殿という建築は、人がその中で暮らしたり使ったりする存在ではありません。つまり、私達が言うところの用途があるわけではありません。現実的に私達の日々生活に役立つわけではなく、言うなれば使い道の無い建築です。にもかかわらず、一説では、かって高さ96メートルの威容を誇ったとも考えられています。それほど巨大な建築を、おそらくは大変な犠牲を払って建造した理由はいったい何だったのか。ひょっとしたら、そこに建築の根源的な意味が存在しているのではないか。

島根県立産業交流会館・くにびきメッセ（写真撮影：小林俊之）

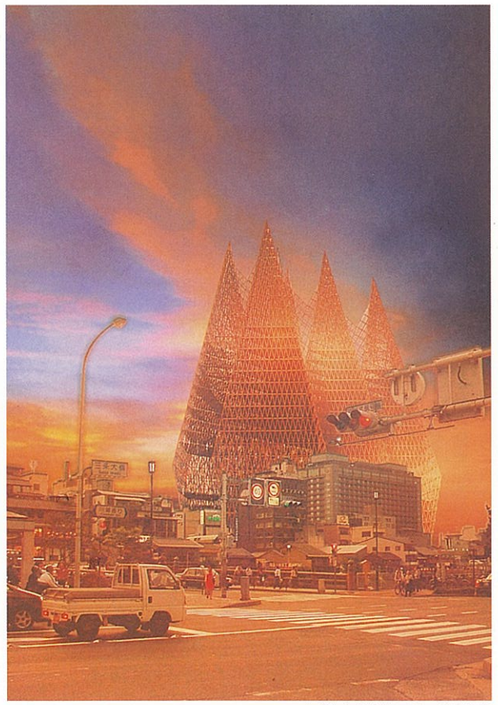
建築家としては恥ずかしい限りですが、30歳を過ぎて初めて海外を訪れ、ギリシャのパルテノン神殿に足を運びました。神殿そのものは列柱がわずかに残っているだけで、その柱列のたたずまいによって、かろうじてかっての姿を思い描く以外にありません。にもかかわらず、私はその神殿を前に、まるで凍りついたかのように動けなくなってしまいました。これは私達が知るところの建築では決してない。しかるに「建築」が厳然としてここに在る。建築ではない「建築」が私の目の前に在る。その時です。私達は、便利さや経済性や心地良さを現代建築において追求する余り、とんでもなく大切なものを失ってしまったのだということに気づいたのは…。

ともあれ、私には出雲大社本殿やパルテノン神殿のようないわゆる「使い道の無い建築」の方が、私達が日々に使いこなしている便利な建築よりもはるかに意味深く、かつ美しく思えます。その「意味」や「美」の真理を私は未だに知りませんが、建築は確実に「理由」無く人の心を打つことができます。深く、美しく、人の憶いをとらえます。その深く根源的な「理由の無さ」にむけて、限り無く「理由」を積み重ねる。それがおそらく「建築を設計する」ということなのでしょう。であるがゆえに、私はこんなに奇妙な建築を創り続けているのだと言っていいでしょう。

つまりは、たとえ倉庫という「理由」を有する建築であろうと、オフィスビルという「理由」を有する建築であろうと、その「理由」を精一杯引き受けつつ、しかるに「理由」無く人々の心を打つことのできる建築をいつかは創りたいと思い続けているのです。思い続けて既に30年。ますます他の建築家とは異った道筋に逸れつつあります。建築はまぎれもなく都市の一部であると考えています。端的に言って、その小さな建築がたったひとつそこに建設されることによって、都市のその場所に特有の力が生まれたり、それまで見えなかったその場所の意味が立ち現れるような建築を創ることを常に考えています。いつも通い慣れている道、馴れ親しんだ街角に、その建築が現れることによって新たな意味や価値が誕生したり、美しさが深まったりするようなことがある。そのような建築をいつか創ることができれば、それこそ建築家冥利につきるというものです。十数年

ほど前、大阪のミナミのど真ん中に、巨大な行灯のような建築を設計したことがあります。クライアントの「キリンビール」から「建築によって企業の精神を表現せよ」との課題をつきつけられました。建築という目に見える物・によって目に見えない心・を表現せよ…というわけです。ほとんど禅問答です。考えあぐね、悩みあぐねて、何度も何度もミナミに足を運びました。いつ訪れても、人と音と、そしてなによりも光が、これでもかとあふれています。その過剰な光の洪水の中で、私は突然こう思いいた到ったのです。「そうだ光だ！」…と。「あり余る光の中に欠けているもの、それは光以外のなにものでもない」…と。結果的に、和紙をサンドイッチしたガラスを用いて、静かで圧倒的な光の塔を設計しました。あり余る光の豊穣の中で唯一欠けているものがあるとしたら、それは人々の心を照らす光だと考えたからです。その思いを巨大な行灯に託しました。いわば「どうとんぼりの灯」です。ところで竣工の日の夕刻、高さ30mからそびえ立つ行灯四基を一気に灯しました。するとその瞬間、蕩々と流れていた雑踏がピタリと止まったのです。道行く人々の全てが地上30mを見上げました。その刹那、かって良く知っていたその場所が、今や全く異った空間になってしまったのを人々は体験したのです。その時です。建築は人の心を打つことによって都市を創造することができるかもしれない、建築の本源的な能力とはこのような力かもしれない…と思ったのは。誰も見向きもしない都市の一画が、意味の深度を深め、美しさの濃度を獲得する。そのような都市性の創出のために建築の力が作動するならば、なおかつその力を制御することが可能ならば、建築を通して都市を構想することさえ可能ではないか。その場所に固有の記憶を手がかりに、たったひとつの建築によって都市を紡ぐことが可能ではないか。この大行灯の場合、ざわめく圧倒的な光の群れが、場所特有の記憶だったのです。従って気をつけなければならないのは、その記憶を如何なる…まなざしで読み取るかということです。そのまなざしが欠如していると、建築を建てることによって往々にして場所の記憶さえも消去してしまいかねません。現代建築は常にそのような根源的な暴力をも有しています。つまり建築は、創造と破壊という両局面において常に両義的であるということです。そのような両義性を踏まえつつ、もう少し都市の記憶について話しましょう。震災の後、神戸や台湾では大なり小なり震災前の記憶に基づいて街を復興しようとしています。中にはほとんど記憶の復元に近い計画さえあります。ましてや復興を急ぐあまり、100年の年月をかけて連綿と創られた街を数年で、それも緊急時にありがちな極端なローコストで復旧しようとするわけです。そしてこれは、本当にかっての記憶を取り戻すことになるのでしょうか。私には一概にそうは思えません。むしろ被災地そのものを、都市公園として、豊かな緑や水もたわわな都市の新たな自然として構想し、構築物を一切作らないことの方が、もしかしたら記憶をより一層深く留めることになるのではなかろうかと思うのです。そのような両義的な創造のあり方へのまなざしを大切にすることによってこそ、新しくかつ懐かしい都市が創造されるのです。　現在私の事務所では、力の大半を注いで「木造超高層建築」の研究を続けています。生産と流通の問題、技術者とその育成の問題等、まだまだ課題は山積みですが、耐震性、防火性、耐火性等、木造に関する技術的な側面は日進月歩の感があり、海外の実例も含め、今や相当の規模の木造建築が実現されています。ただそのほとんどが、実は構造的には鉄構造に準拠するものであり、事実ほとんど100パーセント近くの木造建築の主要ジョイント部は鉄によって補強されているのが現状です。私達のアイデアは、そのジョイント部分も含め、全て木材によって作ろうというものです。それも200メートル近い高さの超高層建

キリンプラザ大阪（写真撮影：Nacása & Partners）


京都市庁舎木造180m 建替え案

築を。構造的にも構法的にも充分可能であることを既に実証しており、デザインも完了しています。唯一の問題は耐風性能です。なにしろ重さが鉄の20分の1ですから…。

日本は世界にも冠たる森林国家です。国土の3分の1、1000万ヘクタールが森林です。なおかつ現在、戦後の人口植林の大半を伐採しなければ森林環境そのものが危機に瀕するという状況です。そのような時期に、木材資源を活用した建築をあらためて研究するというのは充分理に叶っていると考えています。

まずは歴史的木造都市京都の公共建築の全てが木造になるとすれば、実に素敵だと思いませんか。2001年の秋に京都大学が「木造都市」をテーマにした研究成果を発表します。私は都市建築のセクションを担当しています。幻想の木造大建築「出雲大社本殿」に始まった私の建築家としての道筋が、今木造高層建築へと辿り着いたという次第です。我ながら実に面白いと思います。

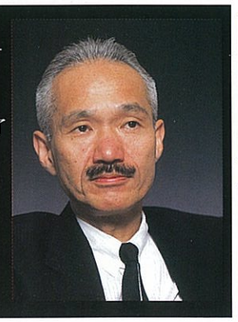
東本願寺参拝接待所［地下建築・内観］（写真撮影：Nacása & Partners）

地下駐車場システムの可能性

20年ほど前、立体駐車場の設計を頼まれたことがあります。全面がガラス張りのアイデアを提案しました。車というのは全てデザインの究極の産物です。一種の美術品ですから、隠すよりむしろ見せる方がエキサイティングです。しかしながら、その案は建設費が高すぎて御破算。最近ドイツで同じアイデアの実に美しい立体駐車場が完成しました。ところでこれまでに幾つかの地下建築物を実現しました。地下建築は地震に強く、極端に環境負荷を受けにくく、従って省エネルギー化に最適です。もちろん景観論争や日照権論争にも無縁です。地下建築物の将来には計り知れない可能性があります。

そういう視点から見ると、地下立体駐車場というのは実に理に叶っている。決して絵空事ではない地下都市の誕生にむけて、もっと多機能的な地下駐車場を今のうちに研究しておくべきでしょう。現在建設中の台北市都市開発プロジェクトの場合、地下2階から7階までの全てのスペースが駐車場です。こうなるとまさ巨大な地下都市です。単なる車のためだけではない、車と人の地下共存空間の開発が不可欠となり始めているのです。

PROFILE



1948年　島根県生まれ
1971年　京都大学工学部建築学科卒業
1980年　京都大学工学部大学院建築学科博士課程修了
　　高松伸建築設計事務所設立
1993年　高松伸建築設計事務所ヨーロッパ事務所設立
1995年　アメリカ建築家協会名誉会員
1997年　ドイツ建築家協会名誉会員
　　京都大学大学院工学研究科教授就任
2000年　高松伸建築設計事務所台北事務所設立

［高松伸建築設計事務所］http://www.takamatsu.co.jp

主な受賞

1984年:日本建築家協会新人賞　1989年:日本建築学会賞、大阪府建築士会長賞　1994年:京都府文化賞功労賞　1996年:芸術選奨文部大臣賞　1998年:公共建築賞優秀賞　1999年:建築業協会賞（BCS賞）　2000年:公共建築賞優秀賞

主な著書

1998年:詩的空間へ（新建築社）
1996年:ARCHITECTURE AND NOTHINGNESS (l'ARCAEDIZIONI)
1995年:陽のかたち（筑摩書房）